

氏 名 さき た とも こ
 崎 田 智 子
 学位(専攻分野) 博士 (人間・環境学)
 学位記番号 人 博 第 47 号
 学位授与の日付 平成 10 年 9 月 24 日
 学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
 研究科・専攻 人間・環境学研究科人間・環境学専攻
 学位論文題目 Reporting Discourse in English — Discourse, Cognition, and Consciousness
 (英語における伝達話法のメカニズム—談話・認知・意識の視点から)

(主査)

論文調査委員 教授 山梨正明 教授 大木 充 助教授 北山 忍

論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、口語英語の会話における伝達話法のメカニズムの解明にある。全体は8章から成る。

第1章「序論」では、伝達話法の定義と意義、談話や文脈等の基本的概念及び本論文の依拠する言語分析の基本概念を概説している。第2章「時制交代理論の概説と問題点」では、口語英語において頻繁に生じるにもかかわらず、変則的で一般的な説明が不可能な現象と考えられてきた伝達節の時制交代現象に関して、既存の枠組みの限界を明らかにし問題提起を行った。既存の諸仮説を談話分析により綿密に検証した結果、伝達節の時制交代現象は、各々の枠組みにおける単一の視点に基づいたこれらのどの仮説によっても十分に説明できないことが明らかにされた。

この問題を踏まえ、続く三つの章において、伝達節の時制交代現象を多角的視点から考察した。まず、第3章「伝達の時制交代現象とその認知背景」では、談話における伝達節時制の具体的な表出頻度を調べ、人称と時制との関連を、回想時の事象認知様式の差異によって説明し、さらに伝達の複雑なプロセスとその解釈的性質を綿密に検討した上で、言語主体が過去の事象を回想認知する際に、被伝達事象との心的関わりの度合いと被伝達話者の人称とによって異なった視点を設定する点を明らかにした。この事実を考慮し、伝達節時制を含む伝達様式の差異が生じる背景となっている認知プロセスの諸相を、近接性、心理的関わり、自己アイデンティティ等の要因を反映する認知的回想モデルによって分析した。特に、与えられた事象を回想する際の伝達者の自己意識が、当該事象の概念化において重要な役割を果たしており、語られる自己と伝達者としての自己が明確に区別されて時制決定の基礎となっている事実を、ナラトロジー、談話分析、認知心理学などの知見に基づいて分析を行った。実際の時制交代現象は、複雑な伝達過程において複数の要因が絡み合った結果もたらされるものであるため、認知的背景以外に時制交代現象を動機づける他の要因も考慮されなければならない。

第4章「伝達時制の発話態度対照機能」では、被回想事象を言語化する過程に焦点を移し、伝達時制の問題に関し、コミュニケーションと談話機能の側面からの説明を試みた。話者態度の特徴分析の結果、伝達節時制の会話のストラテジーのメカニズムを明らかにし、このメカニズムとの関連で話者の発話態度の機能を明らかにした。特に直接話法の伝達動詞は中立的な性質を持つことから、伝達者は自分の主観的解釈に基づいて作り上げたメンタルイメージを効果的に伝達するために、動詞そのもので表わし得ない被伝達話者の発話態度の微妙な推移を時制操作によって談話の中に織り込み、談話を効果的に構成する点を明らかにした。

さらに、第5章「意識の流れ、談話行為、及び時制現象」では、第3章と第4章で問題にした談話状況よりもさらに複雑化した伝達節の時制推移現象に焦点を当て、伝達節と伝達節にかかわる時制が、談話構造と情報の流れにそった話者の意識の流れを表示するものであるという仮説を提示した。この仮説のもとに談話文脈を詳細に吟味し、意識の流れのモデルによって談話構造や情報の展開のプロセスを明らかにした。また、この章では、多方向への時制推移を分析し、これまで誤用と見なされてきた時制形式が談話の流れの中で重要な意味を担う点を明らかにし、一見無秩序とも見える談話の中にも一貫性が

あり、意識の流れと時制形式が巧みに調整されていく過程を分析した。

以上の点を踏まえ、第6章「間接話法における時制現象」では、これまで文レベルで分析されてきた間接話法の時制を文レベルを越える談話文脈において分析し、直接話法に限定されて論じられてきた時制交代現象が間接話法においても生じる事実を指摘し、間接話法の被伝達節中の時制決定のメカニズムに関するより一般的な説明を与えた。日常言語の自然な談話、特に口語体においては、文法的な結束性や論理的な整合性よりも、むしろコミュニケーションの枠組みに適切に調和するために必要な談話の一貫性の方が重要であるという主張に基づいて間接話法を分析し、特に過去完了時制、時制交代現象、伝達節の対話標識としての役割の三点にかかわる問題に焦点を当てながら、被伝達節時制の談話機能を明らかにした。

第7章「伝達話法：その形式と機能」では、さらに、よりマクロな視点から、伝達話法自体の形式と機能、及び対話中の伝達パターンを、談話分析に加えて実験手法を取り入れて分析した。まず、談話機能や文脈にかかわる背景情報の影響をうけない文法構造にかかわる要因によって、話法の選択があらかじめ方向づけられる事実を検証し、次に、伝達内容の前景化、背景化等の談話機能に着目し、この種の談話機能にかかわる要因と伝達形式の相互関係を明らかにした。そして、最終章では、今後の研究への発展と展望を論じた。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は、談話分析的手法を用いることにより、実際の生きた文脈において観察される口語英語の会話資料の広範な記述と分析に基づいて、日常言語の伝達話法のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。

全体は8章から構成されている。第1章は本研究の基本概念的概説、第2章はこれまでの時制交代理論の概説と問題点の指摘、第3章は認知モデルの視点からみた伝達の時制交代現象、第4章は伝達時制と発話態度、伝達目的からみた談話機能、第5章は談話における伝達者の意識の流れと時制交代現象の相互関係、第6章は間接話法における伝達節の時制決定のメカニズム、第7章は談話文脈のマクロ的な視点に基づく伝達話法の形式と機能の相互関係の考察、最後の第8章は今後の研究への発展と展望、にあてられている。

本論文の注目すべき研究成果としては、特に次の諸点が挙げられる。第一に、従来の研究は文-文法レベルにおける伝達話法の研究に終始し、文の集合体としての談話資料や会話資料における伝達話法の研究は等閑視されてきた。これにたいし、本研究は、文レベルを越える談話分析の観点から、日常言語の伝達話法のメカニズムの解明を試み、従来の文-文法の枠内では解決不可能な言語事実の体系的な説明を可能としている。特に、これまでの文レベルに限定された言語学の研究では実質的な説明が与えられなかった伝達話法の時制交代現象に焦点を当て、この種の現象に対し体系的な説明を与えている。第二に、本研究は、談話における伝達のメカニズムを語用論の見地から詳細に分析するため、幅広い口語英語データの談話分析という研究手法を用い、ナラトロジー、言語情報処理、認知心理学等の関連分野の知見を取り入れながら、談話レベルでの伝達理論の構築をめざしている。伝統的な言語学においては、伝達プロセスの具体的な側面を反映する実際の言語資料ではなく、作り上げられた例文を用い、人間の話す実際の言語運用の側面に関する詳細な記述をしなかったため、文脈によって動的に展開していく時制の交代や時制のシフトの問題には注意が払われていない。伝統的な言語学の研究では、実際の談話文脈を捨象して言語使用の状況を理想化し、時制交代のずれやシフトを単に誤用であると見なすか、その事実の存在を認めようとしないう傾向にあった。その点、本論文は、時制現象一般にかかわる自然な言語使用のデータを綿密に分析することにより、伝達にかかわる言語運用の実態の解明を試みている点に意義がある。第三に、本論文では、伝達に際し言語主体が談話文脈で動的に構築していく認知モデルとの関連で、伝達話法の諸相を考察している。本研究で提示されている認知モデルは、伝達行為における伝達者の視点の投影、伝達内容の焦点化と背景化のプロセス、時制・人称のシフトのプロセス等にかかわる言語理解モデルの構築のための下位モデルとして注目される。言語理解のメカニズムの研究は、現在、言語学、認知心理学、言語情報処理をはじめとする認知科学の関連分野の重要な研究テーマとして注目されている。本研究は、柔軟な情報処理を可能とする人間の認知機構の一部としての言語理解のメカニズムの解明に貢献する言語学分野からのケース・スタディーとしても注目される。

今後の研究課題としては、さらに次の点を考察していく必要がある。本研究では、口語英語の伝達話法に焦点を当てたが、文語における伝達様式との比較も重要な研究テーマとして注目される。先行研究においては、時制交代現象は口語的スタイ

ルに特有の現象であるとされてきたが、文語英語の伝達話法の中でも歴史的現在形の使用が広範に認められている。しかし、文語的スタイルの伝達話法の言語資料の体系的な研究は十分になされていないのが現状である。文語体の伝達話法の研究においても、本論文の提示した時制交代現象の理論の適用の可能性は十分に考えられる。本論文は、この方面の研究をさらに具体的に進めていくための基礎的な研究としても、重要な意味を持っていると言える。

本論文の研究成果の一部は、既に国際学会（第3章の一部は国際語用論学会(1998)、第7章の一部は国際応用言語学会(1996)）で発表されている。また、第6章の一部は、T. Gueldmann (ed.) *Reporting Discourse: Form and Function*に出版予定となっている。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の1つは、情報処理、文脈理解をはじめとする人間の認知のメカニズムを明らかにしていくことにあるが、本研究は、この目的に沿った研究として高く評価できると共に、今後の発展がさらに期待される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成10年8月26日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。